



最近の図書館

附属図書館長 東 晃

槌音高くと言えば恰好がよいが、館内の職員諸氏を騒音で悩ませつつ図書館の増築工事が進行中である。もちろん、このため利用者の皆さん、近隣の部局にもご迷惑をかけていることは申訳ないことである。しかし今年9月増築が完成すれば、研究、学習、保存の図書館の三大機能の上に飛躍的な発展が見込まれているのである。「図書館の増築ができたなら、どうなるのですか？」という質問をよく受けるので、それに答える形で少しく最近の図書館のことを書いてみたい。

増築は現在の本館の東側と西側に接続し、一部玄関棟の上部に、延べ4,436 m²であるが、その面積の大部分は書庫の増設に当てられる。増設書庫には電動式集密書架を配して面積の効率的使用がはかられることになっており、このための特別設備費は本年度から2年間配当されることになっている。目下の大略の計画では、増築部分の東側一階に自然科学系部局の雑誌バックナンバーを、同二階に本館既存資料(大型コレクション等)をおき、西側の一・二階増築部分には人文社会系の既存資料が移動することとなっている。増設書庫への移動によって生ずる従来書庫の余裕は本館蔵書の増加に振り向けられ、現在の増加率から見て昭和67年くらいまではもつと推定されている。また開架閲覧室、参考資料室等の拡張整備により、学習・研究の利便がはかられることも勿論である。

上述の自然科学系雑誌バックナンバーとは、各学部・研究所等で継続購入されている雑誌の中、利用度の減ってきている古いものについては、そのバックナンバーを全学に一揃いだけ保存するものとし、その保存を本館が引受けようというものである。これによって激増しつつある雑誌の収納に音を上げている各部局の図書室の悩みを緩和できるものと期待される。このようなバックナンバー保存方式は、最近図書館が新築された京大、名大で採用されており、東大でも現図書館半地下の収納庫がそのために整備された。本学でも電動書架の整備に合わせて本方式に移行する予定であるが、学内の重複雑誌のバックナンバーの処置などの問題があり、各部局と図書館の間で検討を始める時期に来ている。

増築面積の一部は、以前から計画の進んでいる文献情報用電算機の設置のために使われる。これは東京の文献情報センター(東京大学、全国共同利用施設)とオンラインで結ばれる全国ネットワークの一部となるもので、九州・大阪・名古屋・東京工業・京都の各大学が先行し

ており、本学は北海道地区のセンターの役を担うことが期待されている。この計画の詳細を述べることは別の機会に譲ることにするが、学術情報検索サービスが図書館の一つの重要な機能となるのはそう遠いことではない。図書館に通ってコツコツ研究するといったイメージを払拭するような新しい研究機能が図書館に賦与されるわけである。電算機はまた図書館の日常業務の機械化にも使われる。このような発展に備えて、館内外の研修・ワーキンググループの検討なども進んでいる。国家予算にきびしいもののある昨今であるが、増築完成に次いで電算機の導入に全力をあげたいと考えている。

退官によせて

平 清 二

この間まで、厳冬の朝日を浴びて輝いていた手稲の雪も何時しか早春の陽差しを受けるようになりました。毎朝、琴似の宿舎から眺めた心の山とも別れが近づいたことの実感を覚えます。30余年という長い公務員生活のなかで、2年間という短い期間でありましたが、北海道大学は私にとって終生忘れ得ぬものとなり、最後の職場が北大であったことに誇りを感じております。どこまでも悠々と蒼空が広がり、ニレの原生林を持つ学園を去ることは公務員生活に終止符を打つことにもなるわけです。

大正末期の時代の人なら誰しも戦前・戦中・戦後を経験しておられるわけですが、その煽りを受けて学業は半年の短縮となり、卒業と同時に入隊、約3年間は生と死について真剣に考え、20年10月復員、終戦直後の社会・経済が混乱を極めていたなか、当時、東北帝大の法文学部長の紹介で同大附属図書館に採用されたのが、昭和21年の暮近くであったから以来30数年を経たことになります。大学図書館の存在意義は、今も昔も変わりはありませんが、奉職当時の図書館は全く静的なもので、与えられた予算で、仙花紙という粗悪な紙に印刷された新刊書を購入し、細々と目録を作り、出納式で提供するというもので、今日のように学術情報が質・量ともに増大し、細分化・多様化した時代とは比較にならずまさに隔世の感があります。昭和25年頃から外国図書の輸入が始まり、図書館も活気づくようになりましたが、その情報把握のために当時受入主任であったので、文部省の情報主任官室（情報図書館課の前身）に赴き、係官と同行して都内の輸入業各社を巡って入手の状況を伺いながら歩き廻ったことなどが想い出されます。

その後、25年のイールズ事件、30年後半から40年代にかけて大学の移転統合整備計画、教育学部教員養成課程の廃止（宮城教育大学の創設）、大学紛争が大学社会を席捲し、一時は学内が騒然としたこともありました。今にして思えば、どこの大学もこれらの過程を通して確かに大学改革の一転機となって将来を指向しているように思われます。

昭和53年4月、東北大学から名古屋大学に転出しましたが、図書館には新館建築と学術情報システムネットワークの東海地区センター構築という重要な課題がありました。新館建築は、敷地の設定と平面計画に議論百出、難産でありましたが、56年6月竣工、同9月開館の運びとなりました。設計は図書館の職員数、利用者の利便などを配慮して全面開架方式を採用し、当時としては画期的な自動入退館設備を導入してワンポイントチェックシステムをとり、また、管理維持費を最少限に抑えるための諸設備、資料面では各部局から移管のあった学術雑

誌のバックナンバー及びカレント誌の集中管理、人文・社会科学系の共同利用大型図書の集中など、従来弱体であった研究図書館機能の整備充実に重点を置いたものでありました。名古屋大学での電算機による業務処理は、富士通 M160F と V830 を導入して 57 年 1 月から閲覧管理と雑誌管理を稼働させ、その後図書管理と予算管理、情報検索システムと進めて逐次地区のメンバーライブラリーを接続して地区ネットワークを構成しているようですが、55年から57年にかけて、図書館の新営と業務電算化の事業が重なり私なりに繁忙を極めました。振り返ってみますと職員の協力もありましたがよく乗り切れたものと懐古されます。

東北大学に在職中も昭和 46 年新館建築計画のプロジェクトのメンバーとして参加し、将又、本学中央図書館の増改築計画に参画するなど、本学のそれは進行中ですが、東北大および名大の竣工したものをみるにつけ感慨深いものがあります。図書館存在の価値は、建物そのものにあるのではなく機能の内容にあります。本学のそれもよき伝統を生かし、将来の発展を見極めながら機能の充実を進めていただきたいと念願しております。

現在、大学図書館をとりまく環境や動向は大変厳しく、また激しいものがあります。その一つにナショナルレベルでの学術情報システムネットワーク構築計画があります。これはいま、構想の段階から実施の域に入っております。本学では、昭和 53 年 4 月学術情報調査研究会を設けて基本的な事項を調査研究し、昭和 56 年 7 月には北海道大学学術情報システム準備検討委員会を設置して「北海道大学における学術情報システムの具体化について」を発表しました。これを受けて全学的に図書系職員をもって構成した図書業務機械化ワーキンググループが鋭意調査検討を重ねるとともに、地区の国立大学にあっては、地区構成館の機械化ネットワークの円滑な形成とその機能の充実を図るために「図書館情報処理ネットワーク協議会」を設け、その専門的なことについては、「図書館業務機械化開発専門委員会」で調査検討を行い、地域センター設置の基本計画と実施計画を策定して評価を得ておりますが、昭和 59 年度地域センター設置の要求は残念ながら見送られ、皆様の期待にこたえられず、多大な責任を感じております。このような事態になったにも拘らず、本学及び地区大学図書館の結束に些かの乱れもなく、計画の推進に当っておられる態度に深く感銘を受けております。乳白色の不透明な状況におかれましたが決して怯むことなく、更に最善のものを追及し続けていただきたいと願っております。

有為転変は世の常、私は馬齢を重ね先人の驥尾を附してきたに過ぎませんが、自己満足と晴れやかな気持をもって公務員生活に別れを告げることができたのは、偏えによき師・先輩・同僚・後輩に恵まれ、そのなかにあつて育かれ、世の荒波に曝されながらも大過なく勤め得たことに言葉もなくただただ感謝の念で一杯であります。

最後になりましたが、高度情報化・国際化のなかにあつて北海道大学が益々ご繁栄あられることを祈念いたしまして挨拶とします。
(附属図書館前事務部長)

◆ 会 議

第 114 回 図 書 館 委 員 会

く と き 昭和 58 年 11 月 16 日 (水) >

く と ころ 百年記念会館大会議室 >

議 題

1. 教養分館利用内規 (案) について
2. そ の 他

第115回 図書館委員会

<と き 昭和59年3月15日(木)>

<ところ 教養分館視聴覚室>

議 題

1. 昭和60年度概算要求の基本事項について
2. 増設書庫の配架計画について
3. 1984年版学内共同利用自然科学系外国雑誌の購入経費について
4. 学内共同利用逐次刊行物叢書類について
5. その他

第77回 教養分館委員会

<と き 昭和58年11月14日(月)>

<ところ 教養分館会議室>

議 題

1. 昭和58年度学生用図書費の追加配当について
2. その他

第78回 教養分館委員会

<と き 昭和59年1月17日(火)>

<ところ 教養分館会議室>

議 題

1. 昭和59年度教官指定図書の選定について
2. その他

全学図書(担当)掛長会議

<と き 昭和58年11月7日(月)>

<ところ 教養分館視聴覚室>

議 題

1. 図書業務電算化計画について
2. 1984年版外国雑誌の予約について
3. 学内共同利用自然科学系外国雑誌について

全学図書(担当)掛長会議

<と き 昭和58年12月7日(水)>

<ところ 附属図書館会議室>

議 題

1. 図書業務電算化計画について
2. その他

全学図書(担当)掛長会議

<と き 昭和59年3月13日(火)>

<ところ 百年記念会館大会議室>

議 題

1. 増設書庫の配架計画について
2. 1984年版学内共同利用自然科学系外国雑誌の購入経費について
3. 学内共同利用逐次刊行物叢書類について
4. その他

「図書業務機械化ワーキンググループ」第12回委員会概要

期 日 昭和58年10月19日

場 所 教養分館視聴覚室

北海道大学図書業務機械化のための準備作業について

——九州大学並びに大阪大学の例を中心に——

今回は、九州大学および大阪大学附属図書館の電算化を手がけた「日本電気(株)」の担当者から、システム開発にあたって必要とする大学側としてのスケジュールの組立て方および事前準備などのポイントについて、両先行館での経験をふまえた詳細な説明を受け、質疑応答、意見の交換を行った。

「図書業務機械化ワーキンググループ」第13回委員会概要

期 日 昭和59年1月24日

場 所 附属図書館会議室

受入、整理、雑誌および閲覧の各班別討議の結果について、各班長から資料に基づき報告があり、質疑応答が交わされた。

ついで石川主査からこの班別報告のとりまとめとその取扱い方については、各班長と閲覧課長補佐、図書館専門員、学術情報掛員を交えた会議を開き協議することとした旨提案があり、これが了承された。

その他大学図書館ネットワーク接続状況及び文献情報センターと東京工業大、名古屋大、大阪大との接続試行予定等について、石川主査から資料に基づき説明が行われた。

第57次国立七大学附属図書館協議会

<と き 昭和58年10月13日(木)>

<当番館 名古屋大学附属図書館>

標記協議会は、文部省から廣田情報図書館課長および倉橋専門員の列席を得、国立7大学の附属図書館長、事務部長および課長が出席して行われた。

<協 議 題>

1. 学術情報システム計画におけるRC(地域センター)の設置構想について(北海道大学)
2. RC館における目録システムについて(東京大学)
3. 学術情報センター(東大・文献情報センターを含む)の整備充実について(名古屋大学)
4. 著作権の集中的処理に関する「中間まとめ」(文化庁)について(東京大学)
5. 大学図書館間における文献複写業務に係る著作権の問題について(大阪大学)
6. 保存図書館について(東京大学)
7. 学術雑誌(バックナンバー)の集中・共同利用化について(京都大学)
8. その他(図書館公開、業務等の見直し)(名古屋大学)

◆ 図書館だより

カナダ・アルバータ州政府より図書寄贈される

昨年12月16日(金)、カナダ・アルバータ州政府対外大臣ジェームズ・ホースマン氏一行7名が本学を表敬訪問され、その際図書59冊を寄贈された。

これらの図書は、同州の政治・文学・歴史に関するもので、本学教職員・学生の利用を期待するものである。

ここに、カナダ・アルバータ州政府及び同対外大臣に対し、深く感謝の意を表するものである。

資料紹介

昭和 58 年度 全国共同利用図書購入費で購入した図書

Collection of Russian Emigre Fiction.

(ロシア亡命文学コレクション)

1917 年革命以来、ロシア文学はソビエト文学と亡命文学に分割して考察されるのが常であった。近年に至るまで両者の相互的影響については殆んど注意が払われることがなかった。また、この分野の研究者は資料不足と所在追跡の困難に苦しめられてきた。無名作家については言うまでもないが、著名作家の作品ですら事情は余り変わらない。

本コレクションはこのような事情を抜本的に改善する目的を以て多年にわたり系統的に収集されたものであり、わが国のみならず欧米諸国の大学図書館、国立図書館に欠けている作品を数多く含んでいる。著名な作家だけでなく、ここ 10 年間に注目されるに至った作家の著作を収集している点も本コレクションの一大特色となっている。さらに、ロシア亡命文学史の背景を示す意味で 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて国外で出版された数人の作品も収集した。その大部分は原本刊行後、リプリントされたことがない。なかでも、アーノルディとベルビ=フレロフスキーは特筆に価する。

本コレクションの少なからぬ書物は、A. N. ベヌア、M. E. ゼルノフ、P. ミリューコフ、S. エルンスト、L. A. グリーンベルグ、A. ポポフ、A. P. ストルーヴェ、N. バリエフなど著名な愛書家、出版人、文学・芸術批評家の私文庫に由来する。

第二次世界大戦においても、また、戦後においてもソビエト文学に多大な影響を与えた作家とその作品は枚挙に暇がない程であるが、1917 年以降ソ連で出版された書誌には研究に役立つ適当な文献は全くないといって過言ではない。その意味でも、本コレクションに収集された作品は貴重であり、例えば、B. サビンコフ、A. A. ディグコフ=デレンタル、M. P. アルツィパーシェフ、A. ケメンスキーなどのいくつかの作品を挙げるだけでもその重要性を知ることが出来よう。

さらに、同一作家の同一作品についてソ連版と西欧版を比較研究することにより両者の間に極めてドラマチックな相異点が明らかとなる。アレクセイ・トルストイやイリヤ・エレンブルクのいくつかの作品はソ連版には含まれていない。ソ連版で刊行された作品の中には検閲され、縮小されているものが少なくない。パリ版やベルリン版の 3 分の 1 もが削除されたものもある。

本コレクションの少なからぬ書物には、かつての所有者による書き込みがあり、関心を惹く。

以上に見るごとく、本コレクションは全体としてのロシア文学を研究する上で極めて重要な資料であることは言うまでもないが、広くは、ソ連の文化、社会・政治史を研究する上でも、ソ連資料によって代えることの出来ない貴重な文献ということが出来よう。

昭和 58 年度 特別図書購入費で購入した図書

Irish Political and Radical Newspapers of the 20th Century.

(アイルランドの急進派紙・誌) マイクロフィルム

アイルランドにおける 20 世紀の政治運動、労働、女性独立、民主化など広い観点に立ってまとめたものである。したがって、学術論文から諸組織のプロパガンダまでの豊富な資料を網羅している。

教育時論 復刻 第 4 期：明 41-45

近代日本の教育上の時事を論じた総合雑誌で純民間出版誌である。

宗教衝突事件、国定教科書について、又一貫して教師の質と待遇の向上を叫び教育政策や制度について論議、批判したものである。

Материалы истории русской революции.

(ロシア革命史研究重要資料) マイクロフィルム

第一次ロシア革命期のロシア社会民主労働党の非合法機関紙や十月革命期の同党及び社会革命党の資料、ソビエト政権の文書、会議速記録を収集したものである。また、1920-30 年代の革命と民族問題の雑誌等も含まれている。

Cujacius, J. Opera Omnia in decem tomos distributa.

Paris. 1758. Folio.

(クヤキウス全集)

16 世紀、フランスを代表するローマ法学者であり、ローマ法学の新境地をひらいた J. クヤキウスの全集である。

**Johann Samuel Friedrich von Boehmer, Meditationes in
Conditutionem Criminales Carolinam. 1770.**

(カロリナ刑法典)

カロリナ刑法典の註釈。

ベーマーの著作の中でその晩年に属するもので、ドイツ普通法学の代表的作品であり、刑事法学説史において「総論」の体系を構築した嚆矢と目される。

Economy and Society. 1972-1982.

(経済と社会)

マルクス主義の立場で経済学、社会学、政治学に挑むイギリスの新しい社会科学の総合誌である。

東亜日報 (1920-1977 年)

マイクロフィルム

韓国で歴史的にも伝統があり、内容的にも高水準の最も著名な代表紙である。

昭和 58 年度 学部共通図書購入費で購入した図書

復刻版 人民日報索引 1-12 卷 (1946-1959)

「人民日報」は 1946 年に創刊され、今日まで継続している中国共産党中央委員会機関紙である。

本索引は、その 1979 年までの記事を分野別にまとめた記事索引であり、一部分には“人名索引”も付いている。

復刻 金の船・金の星 (大正 8-昭和 3)

大正 8 年「金の船」として創刊。大正 11 年から「金の星」と改めた。以来昭和 3 年まで 101 冊を刊行し我が国の児童文化、文学史上に絶大なる足跡をしるした。

主に子供読者を対象とした総合文芸誌であるが、大正デモクラシーを子供のための文芸・文化・教育の分野をになった代表的なものである。

Hölderlin Jahrbuch. vol. 1-20. (1944-1975/77)

(ヘルダーリン年報)

ヘルダーリンの作品に関する研究・文献等々のあらゆる方面にわたる貴重な資料を網羅したものである。

Preussische Gesetzsammlung. 1806-1941.

(プロイセン法令集)

1810 年以降プロイセンで出された法令を歴年別を集めて整理したものである。

Frühmittelalterliche Studien. Bd. 1, 3-15. (1967, 1969-1981)

Rezister zu Bd. 1-5. (1974)

(初期中世研究)

中世初期に関する研究論文を集めた年報。

現在のドイツの学界の第一線の水準を示すものである。

◆ 規 程

北海道大学附属図書館教養分館利用内規

(趣 旨)

第 1 条 北海道大学附属図書館閲覧規程第 20 条に基づき、北海道大学附属図書館教養分館(以下「教養分館」という。)の利用については、この内規の定めるところによる。

(定 義)

第 2 条 この内規において図書館資料(以下「図書等」という。)とは、次の各号に掲げるものをいう。

1. 図 書
2. 逐次刊行物(雑誌・紀要等)

3. 記録及び古文書
4. 視聴覚資料
5. その他の資料

(利用資格)

第3条 教養分館を利用できる者は、次の各号に掲げる者とする。

1. 本学の職員
2. 本学の学生（研究生・聴講生等を含む）
3. 附属図書館長（以下「館長」という。）及び附属図書館教養分館長（以下「分館長」という。）が許可した者
2. 本学の名誉教授は、前項第1号の規定に準ずるものとする。

(利用票)

第4条 教養分館を利用する者は、利用票の交付を受けなければならない。ただし、職員にあっては身分証明書、学生にあっては学生証をもって利用票に充てるものとする。

第5条 教養分館利用者は、利用票を掛員に提示しなければならない。

(開館時間)

第6条 教養分館の開館時間は、次の各号に掲げるとおりとする。

1. 平日 午前9時から午後5時まで
2. 土曜日 午前9時から正午まで
2. 前項の規定にかかわらず、開架閲覧室及び1階の一般閲覧室は、各期休業日等を除き、平日は午後8時、土曜日は午後4時30分まで開館するものとする。
3. 前各項の規定にかかわらず、分館長が必要と認めたときは、臨時に開館時間を変更することができる。

(休館日)

第7条 教養分館の休館日は、次の各号に掲げるとおりとする。

1. 日曜日
2. 国民の祝日に関する法律に規定する休日
3. 12月25日から1月7日まで
2. 前項の規定にかかわらず、分館長が必要と認めたときは、臨時に休館することがある。

(館内閲覧)

第8条 開架閲覧室に備え付けの図書等は、その室内において自由に閲覧することができる。ただし、機器を使用する資料を除く。

第9条 書庫内に所蔵する図書等の閲覧を希望する者は、所定の請求票に必要事項を記入し、掛員に提出しなければならない。

2. 前項の規定にかかる1回の請求冊数は、原則として5冊以内とし、開架閲覧室において閲覧するものとする。

(館外貸出)

第10条 教養分館所蔵の図書等の館外貸出しを希望する者は、所定の借用証に必要事項を記入し、利用票を添えて掛員に提出しなければならない。ただし、次の各号に掲げる図書等は、館外貸出しを行なわない。

1. 参考図書（事典・便覧・目録等）
2. 新着、未製本雑誌等

3. 貴重図書
 4. 視聴覚資料
 5. 分館長が貸出しを不相当と認めた図書等
- 2 分館長の指定により書庫等に別置した図書等は、前項各号の規定にかかわらず貸出すことができる。

第11条 館外貸出冊数及び期間は次のとおりとする。

図書(製本雑誌を含む) 3冊 10日以内

- 2 記録、古文書及びその他の資料の館外貸出しについては、分館長が別に定める。
- 3 館長及び分館長が許可した者に対する館外貸出冊数及び期間は、その都度分館長が定める。
- 4 館外貸出期間の延長は行なわない。
- 5 前条第2項に規定する図書等の貸出冊数及び期間については、分館長が別に定める。

(図書の返却)

第12条 貸出しを受けた図書等は、貸出期間内に返却しなければならない。

- 2 利用資格を失った者は、貸出しを受けた図書等をただちに返却しなければならない。
- 3 貸出期間中であっても必要に応じ返却を求めることができる。

(二次保管)

第13条 分館長は、部局長より教養分館所蔵の図書等を資料室等において二次的に保管し、利用に供することの申出があったときは、保管させることができる。

- 2 前項の規定にかかる保管の責任者は部局長とし、保管期間は1年以内とする。ただし、必要に応じ更新することができる。

(入庫検索)

第14条 書庫内に入庫し、図書等を検索することができる者は、次の各号に掲げる者とする。

1. 本学の教官(名誉教授を含む)
 2. 分館長が許可した者
- 2 入庫検索のできる時間は、次の各号に掲げるとおりとする。
1. 平日 午前9時から午後4時40分まで
 2. 土曜日 午前9時から正午まで
- 3 前項の規定にかかわらず、分館長が必要と認めたときは、臨時に入庫検索時間を変更することができる。

(転貸の禁止)

第15条 貸出しを受けた図書等は、他に転貸してはならない。

(弁償)

第16条 閲覧中又は貸出しを受けた図書等を損傷又は紛失した者は、同一図書もしくは相当額を弁償しなければならない。

(利用の制限)

第17条 分館長は、この内規に違反した者、掛員の指示に従わない者及びその他不都合な行為をした者に対し、一定の期間教養分館の利用制限又はその他の処置をとることができる。

(補則)

第18条 視聴覚室等の利用については、分館長が別に定める。

第19条 この内規に定めるもののほか、教養分館の利用に関し必要な事項は、分館委員会の議を経て分館長が定める。

附 則

- 1 この内規は、昭和58年11月16日から施行する。
- 2 北海道大学附属図書館教養分館閲覧内規(昭和44年9月18日制定)は廃止する。

◆ 研 修

昭和58年度 大学図書館職員講習会に参加して

<日程 昭和58年11月15日(火)~11月18日(金)>

<会場 東京大学総合図書館>

本講習会は、大学図書館活動を促進するため大学図書館の中堅職員に図書館業務の最新の知識及び専門的技術を習得させ、その資質の向上を図ることを目的として、昭和39年以降毎年行われてきた。

東京会場である東京大学総合図書館では、国・公・私立大学及び高専の図書系職員96名の参加があり、終始熱心に受講し、予定通り4日間の全日程を終了した。

講習会は、文部省担当官及び大学の先生方を講師として、1)大学図書館の使命、2)学術情報センターシステムと大学図書館の役割、3)大学図書館のシステム化、4)学術雑誌総合目録データベースの形成と利用、5)大型計算機センターにおける情報検索システムの現状、6)書誌情報の国際的標準化とMARCの利用、7)海外における学術情報流通体制の動向、8)大学図書館におけるニューメディア、9)一次資料の収集整備と相互利用、10)最近の著作権関係の課題についての10講義が行われた。

これらの講義から大学図書館およびそれをとりまく状況が予想以上に速く変化していることに強い感銘を受けた。

現在、北海道大学においては図書業務機械化ワーキンググループがシステム開発等鋭意調査検討を進めており、近い将来機械化による実務を担当することとなる一員として、今後に期待するところ大なるものがある。

(受入掛 桑野 勇次)

◆ 受 贈 図 書

本学教官著作物

〔本 館〕

名 誉 教 授

牧 野 佐二郎 この旅に……〔セントロ・ソーム〕

酒井 昭・吉田静夫(低温科学研究所) 共著

植物と低温〔東京大学出版会〕

井 手 貢 夫 井手貢夫随筆集 その1. 私の山・旅・友〔朝日出版〕

横 道 英 雄 工学系のためのテンソル解析〔技報堂出版〕

文 学 部

田 中 彰 日本人と東南アジア <インドネシアで考える>〔小学館〕

塩 谷 鮎 ルター聖書 抜粋・訳注〔大学書林〕

大 島 正 二 現代字音の研究

〃 資料・索引〔汲古書院〕

教育学部

- 布施 鉄 治 (共著) 社会学方法論〔御茶の水書房〕
 (共編) 現代日本の地域社会〔青木書店〕
 (共編) 日本社会の社会学的分析〔アカデミア出版会〕

法学部

- 五十嵐 清 (共編) 法律論文の考え方・書き方〔有斐閣〕
 石川 武 序説・中世初期の自由と国家〔創文社〕
 中村 睦 男 社会権の解釈〔有斐閣〕
 内田 貴 抵当権と利用権〔有斐閣〕

理学部

- 松永 義 夫 分析化学の進歩〔廣川書店〕
 喜多英明・魚崎浩平 電気化学の基礎〔技報堂出版〕

歯学部

- 石川 純 歯周病学〔クインテッセンス出版〕
 山崎 岐 男 胆嚢胆管造影法の実際〔富士プリント出版部〕

工学部

- 杉野目浩・大澤映二(理学部) 共訳
 三次元の有機化学 ―立体化学と立体配座解析―〔養賢堂〕

農学部

- 八戸 芳 夫 北海道における集約的家畜生産技術の確立に関する基礎的研究〔北海道大学農学部〕

応用電気研究所

- 荒川 泓 (共編) 化学の原典 第Ⅱ期 2 電解質の溶液化学〔学会出版センター〕

低温科学研究所

- 木下 誠 一 理科年表読本 雪の話・氷の話〔丸善株式会社〕
 若浜 五 郎 雪・氷・人～北の四季～〔北海道新聞社〕

◇ 人事往来 ◇

<図書館委員会委員>

- | | | |
|--------|---------------|---------------|
| 飯田 正 一 | (歯学部 教授) | 58.12. 1 (再任) |
| 米村 昭 二 | (文学部 教授) | 59. 4. 1 |
| 狩野 陽 | (教育学部 教授) | 〃 (再任) |
| 瀬川 信 久 | (法学部 助教授) | 〃 |
| 平尾 健 一 | (薬学部 助教授) | 〃 |
| 喜田 宏 | (獣医学部 助教授) | 〃 |
| 数坂 昭 夫 | (触媒研究所 助教授) | 〃 (再任) |
| 木村 汎 | (スラブ研究センター教授) | 〃 |
| 菅野 盛 夫 | (医学部 教授) | 59. 4.21 (再任) |
| 高木 徹 | (水産学部 教授) | 59. 5. 1 (再任) |
| 稲垣 春 男 | (医療技術短期大学部教授) | 59. 5.19 (再任) |

<配置換・転任等>

- | | | |
|--------|---------------------|----------|
| 松川 衛 | 事務部長(山口大学附属図書館事務部長) | 59. 4. 1 |
| 平田 忠 夫 | 閲覧課課長補佐(閲覧課図書館専門員) | 〃 |
| 杉尾 勝 茂 | 閲覧課図書館専門員(整理課受入掛長) | 〃 |
| 宇野 弘 純 | 閲覧課閲覧掛長(閲覧課参考調査掛長) | 〃 |

| | | |
|-------|--------------------------------|----------|
| 佐藤透 | 整理課受入掛長(農学部図書掛長) | 59. 4. 1 |
| 山口國雄 | 閲覽課參考調査掛長(低温科学研究所図書掛長) | " |
| 小林信一 | 整理課會計掛主任(教養部會計掛主任) | " |
| 荒川嗣雄 | 整理課庶務掛主任(整理課庶務掛) | " |
| 富田健市 | 整理課雜誌掛(整理課整理掛) | " |
| 加徳健三 | 整理課教養分館整理掛(閲覽課閲覽掛) | " |
| 川端美明 | 閲覽課閲覽掛(整理課雜誌掛) | " |
| 石黒克介 | 北見工業大学附属図書館事務長(閲覽課課長補佐) | " |
| 佐竹順一 | 医療技術短期大学部會計掛(整理課會計掛) | " |
| 山下洋一 | 旭川医科大学教務部図書課閲覽参考係長(整理課教養分館整理掛) | " |
| 田村善徳 | 農学部図書掛(閲覽課閲覽掛) | " |
| 遼昭二 | 工学部総務課図書整理掛長(工学部総務課図書掛長) | " |
| 和田章憲 | " 図書閲覽掛長(小樽商科大学附属図書館運用係長) | " |
| 関根正宏 | 農学部図書掛長(医学部図書閲覽掛長) | " |
| 矢野誠 | 低温科学研究所図書掛長(北見工業大学附属図書館整理係長) | " |
| 柳田実 | 小樽商科大学附属図書館運用係長(工学部総務課図書掛) | " |
| 木下彰 | 北見工業大学附属図書館整理係長(") | " |
| 藤島隆 | 医学部図書閲覽掛長(旭川医科大学教務部図書課閲覽参考係長) | " |
| 東重俊 | 医学部図書整理掛(水産学部図書掛) | " |
| 菊池健二 | 水産学部図書掛(医学部図書整理掛) | " |
| 山田達雄 | 文学部図書掛(教育学部図書掛) | " |
| 船木俊男 | 工学部総務課図書整理掛(文学部図書掛) | " |
| 土田加代子 | 農学部用度掛(医学部図書整理掛) | " |
| 佐口英二 | 教育学部図書掛(農学部図書掛) | " |
| 平松麗子 | 医学部図書整理掛(工学部総務課図書掛) | " |
| 渡部文夫 | 工学部総務課図書整理掛(工学部総務課図書掛) | " |
| 斉藤輝子 | " (") | " |
| 羽川明 | " (") | " |
| 柴森義晴 | " (") | " |
| 松野とも子 | " (") | " |
| 渡辺涼 | 工学部総務課図書閲覽掛(") | " |
| 江嶋千江子 | " (") | " |
| 横山彰一 | " (") | " |
| 桜洋子 | 整理課整理掛(農学部図書掛) | 59. 5. 1 |
| 井手上恵子 | 閲覽課閲覽掛(整理課整理掛) | " |
| 三浦智 | 閲覽課教養分館閲覽掛(閲覽課閲覽掛) | " |
| 池内斐子 | 農学部図書掛(閲覽課教養分館閲覽掛) | " |
| <採用> | | |
| 片野慈子 | 整理課庶務掛 | 59. 4. 1 |
| 景山美智子 | 整理課受入掛 | " |
| 秋葉純江 | 整理課整理掛 | " |
| 砂田和子 | 整理課教養分館整理掛 | " |
| 松見浄子 | 閲覽課閲覽掛 | " |
| 坂井香子 | 閲覽課參考調査掛 | " |
| 鈴木美樹子 | 閲覽課教養分館閲覽掛 | " |

<退 職>

| | | |
|---------|--------------|-----------|
| 清 水 薫 | (閲覧課教養分館閲覧掛) | 59. 3. 14 |
| 高 橋 篤 子 | (整理課受入掛) | 59. 3. 18 |
| 中 山 よう子 | (整理課庶務掛) | 59. 3. 31 |
| 高 岡 純 子 | (閲覧課閲覧掛) | 〃 |
| 斉 藤 恵 子 | (整理課整理掛) | 〃 |
| 安 達 美都里 | (閲覧課参考調査掛) | 〃 |
| 佐 藤 享 子 | (整理課教養分館整理掛) | 〃 |
| 平 清 二 | (事務部長) | 59. 4. 1 |

北海道大学附属図書館報 「楡蔭」 (通巻 62 号)

1984 年 5 月 30 日 発行 発行人 松 川 衛

編集委員 佐藤繁好(長)・石川雅夫・遠藤雄作・平田忠夫・杉尾勝茂・成田 稔・嶋崎 功
佐藤 透・山本幾夫・黒田泰行・庄司重陽・宇野弘純・山口國雄・高砂 慶・星賀 隆

発行所 北海道大学附属図書館 札幌市北区北 8 条西 5 丁目 電話代表 716-2111 (2967)

印刷所 文栄堂印刷所 札幌市中央区北 3 条東 7 丁目 電話代表 231-5560・5561